修学旅行生で活気づく農村ホームステイ
食育を通じて十勝農業の未来を切り開く

北海道の元気！NPO訪問

47 NPO法人 食の絆を育む会

文・加藤知美

◇ 農家民泊で農業体験、修学旅行生を受け入れ

ようやく冬の眠りから覚めた十勝の大地に向かい、太平洋に程近い浦幌町に事務所を構える「NPO法人食の絆を育む会」を訪ねた。農業や漁業、林業など一次産業が盛んな十勝地方で、管内の農業などのさらなる発展や、次代を担う子どもたちに「食の絆」を育むことを目指して設立された。

主な事業は農村ホームステイ。大阪などから修学旅行で北海道に来る高校生を、十勝管内の農林漁業者宅で受け入れ、農業体験や生活体験、受け入れ家族とのふれあいを通じてつながっていこうというものだ。主に秋に実施している農村ホームステイは、受け入れ可能な農林漁家の調整作業が半年前から始まる。二〇一二年度は四校の一三二六名の修学旅行生を一泊二日で受け入れた。子どもたちにとって緊張の対面からおよそ二四時間の滞在だが、みるみるうちに打ち解けて「帰りたくなくなる」という思いに変わる。各農家に二～四人ずつに分かれて連れて行ってもらい、農場を見学したりトラクターに試乗したり、夕食に使う野菜を収穫したり、酪農家の場合は搾乳や牛舎の掃除を手伝う。夕食の準備を一緒にして「いただきます」と手を合わせて食べる食事は格別。翌朝も農作業の手伝いなどをして、あっという間にお別れの時間になる。特別なもてなしはなく、ありきたりの農家の日常を過ごしてもらうのだが、食事のときの団らんなど、わが子のように接してくれる温かい時間に子どもたちの心もすっかりほぐれるのだろう。

命の糧を生み出す一次産業の現場で生産者の思いに触れた子どもたちは、多くのことを感じ取って帰ってゆく。出発前には乗り気ではなかった子どもも、生産者との関係を築けたことで農林漁村や食べ物に対する捉え方、感じ方が変わることを引率の先生も実感している。体験を通じて、それまで他人事だった食料生産の場が身近なものとなり、愛着を持つようになるのだ。

こうした取り組みによって、都市部の食べ手と農村部の作り手の相互理解を生み出し、消費者と生産者が支えあう関係をつくることで、将来的に十勝の農業の未来を切り拓こうという考えである。

牛舎の掃除で農作業の大変さを実感

◇ 農村の価値を都市に発信、取り組みは十勝全域に

理事長で事務局長の近江正隆さんは東京出身で、食に関してもともとは都市でもっぱら消費する側だった。一〇代の頃、自然の中での暮らしたいと思い、一次産業に挑戦することを決めた。酪農を経験した後、漁師に憧れて仕事を探し、浦幌町でサケなどの漁をする船の乗組員となった。そして、水産物を加工してインターネットでの販売を始めた。今で言う六次産業化だ。マーケティングに力を入れ、売上はみるみる伸びたが、消費者

の欲しいものを提供するだけの商売に疑問がわき始めた。都会の価値観に一方向的に合わせるのではなく、農林漁業の営みを身近に感じて理解してもらう必要があると考えた。近江さんは、一次産業に身を置きつつも消費者と交流したことで、食べ手と作り手、つまり都市と農村が切り離された存在ではなく相互補完して支えあうことが大事だと気付いた。

食を育む農林漁業の価値と役割を次世代に伝えていくために、修学旅行生を農家などが受け入れる農村ホームステイ事業は十勝管内全域に広がり始めた。二〇〇八年度に浦幌町で実施したのを皮切りに、二〇一一年秋にNPO法人を設立し、十勝全域の農林漁家が地域事情を反映させながら安定的に実施できる体制を目指している。NPOの組織は、各地域の農村ホームステイ受け入れ農家でつくる会で構成されている。現在は、一六市町村に及ぶ一一団体。受け入れた農家の戸数も年々増え、現在は四五〇戸にのぼる。

◇ 食や一次産業への理解を深める事後学習にも着手

さらに、農村ホームステイで温かく楽しい時間を過ごして生まれる「愛着」を、食や農林漁業への「理解」に変えるために、子どもたちが学校に戻ってからの「事後学習」に取り組んでいる。ホームステイ終了後、数カ月して実施するのだが、まずステイ先の家庭のビデオレターを上映して、楽しかった体験を思い出してもらい、その状態で農林漁業の大切さやそれらをとりまく社会情勢などの講話を行う。これに加えて、家庭科の時間を利用し、十勝からじゃがいもを取り寄せて調理実習をするといったプログラムも行われる。

修学旅行に組み込まれる農家での滞在は参加者負担で経費を賄うが、事後学習に財源はない。まずは、賛助会費などの自主財源をあてて開始したが、今後はその必要性や効果を訴えて公的機関の資金や参加費用への加算などを予定している。NPOの事業として農村ホームステイだけに絞れば安定的な運営は可能だ。しかし、事後学習に取り組むことで、体験のみに終わらせず、食や農林漁業への理解にしっかりつなげることができると確信し、試行錯誤が続く。受け入れ農家とNPOが、ミッションを共有し役割分担をすることを大事にしている。農家だから言えることもあるが、客観的な価値はNPOが伝えるような工夫だ。各地域の農家団体の事務局を担う行政担当者との協働にもミッションの共有が欠かせない。

一泊した後のお別れは涙、涙…

また、農村ホームステイから事後学習への流れを確固たるものにし、都会の子どもたちと農林漁村との絆が続くためには、担任教師の継続的な関わりやフォローがあることが望ましい。NPOとして先生方のサポートにも力を注ぐのだが、教師の卵である教育大生にも注目し、関係機関と連携したプログラムにも協力している。

新しい公共の担い手として、次々と課題解決に向かって行動を起こす近江さんだが、ひとつの仕組みが確立すれば、しかるべき担い手にバトンタッチしていくつもりだ。グローバル化、価値観の多様化など、地域社会が厳しい環境にさらされている今、NPOや行政や学校などが連携する新しい枠組みへの模索が続いている。従来の公共セクターでは考えにくい新しい手法とNPOならではの身軽さで課題を乗り越え、成果が出れば地域でその仕組みが普遍化し、NPOの存在が不要になるのがゴールだと考えている。

事後学習でさらに深い理解を

◆ NPO法人食の絆を育む会
所在地　十勝郡浦幌町字宝町53－26
TEL　015－578－7955
WEB　http://www.shokuhug.com/